知の探究シリーズ

世界の神話がわかる

[民族の聖なる神と人の物語]を探究する!

学習院大学教授
吉田敦彦 監修
高橋清一|和田義浩
山本和信|高橋雅子
鰆木周見夫 著

人類類の誕生と神話の発生
神話話の種類とその意味
民族族・文明の興亡と神話の
変遷遷
ギリリシア神話
ケルルト神話
ゲルルマン神話
スララヴ神話
インンド神話
ペルルシア神話
中国国・朝鮮神話
日本本神話
アメメリカ・インディアンの神話と
ものの背景
インンカとアンデスの神話
マヤヤとアステカの神話
北米米インディアンの神話
「記記・紀」の背後に潜む
「殺殺戮の歴史」
日本本神話とギリシア神話の
類類似

◎知の探究シリーズ◎

世界の神話がわかる

［民族の聖なる神と人の物語］を探究する！

知の探究シリーズ

世界の神話がわかる

監修者

吉田敦彦

著　者

高橋清一／和田義浩
山本和信／高橋雅子／鰆木周見夫

発行者

阿部林一郎

組　版

株式会社公栄社

印刷所

図書印刷株式会社

製本所

図書印刷株式会社

発行所

株式会社日本文芸社

〒101-8407 東京都千代田区神田神保町1-7

TEL.03-3294-8931[販売],03-3294-8920[編集]

振替口座　00180-1-73081

*

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

Printed in Japan　ISBN4-537-07811

11097081 2-112010920Ⓝ06

編集担当・石井

監修のことば

世界と日本の神話

現在この地球上に生活している人間は、皮膚や髪の毛の色であるとか、背の高さ、あるいはまた顔だちなどに、いろいろ目立つ違いはあるが、生物学的に分類すれば、みながヒト科の動物の同じ種に属している。その種を専門の学者たちは、「考えるヒト」という意味の「ホモ・サピエンス」という、ラテン語の学名で呼んでいる。

ホモ・サピエンス種は、さらに細かく分類できる。そしてその場合にも、現在の人間は例外なくすべてが、その種の中の同一の亜種に属している。その亜種は、ホモ・サピエンスの中でも、考える力がとりわけ優れているヒト科の生物を意味する「ホモ・サピエンス・サピエンス」という、長い学名で呼ばれている。

つまり現在の人間のあいだには、「人種」という言葉で呼べるような、種類の違いはじつはないのだ。それでこの今の種類の人間は、地球上に最初に出現してから現在まで、いつの時代どこの場所でも、同じ考える力を持ち、それを使いながら生活してきたのだ。

その考える力を人間は一方では、さまざまな道具を発明するなどして、周囲の自然を自分たちの暮らしのために、より有効に利用することのためにも用いてきた。だがそれだけではなく人間は他方でまた、いつどこでも、この世界と自分たちがその中で営んでいる生き方が持つ意味を、懸命に考える努力もしてきた。

人生の意味を、想像力を懸命にめぐらせながら、世界と結びつけて考え、理解しよう

として、人間が続けてきたこの努力によって、現在まで世界の各地において、それぞれが豊かで興味深い内容を持つ、びっくりするほどさまざまな物語が生み出されてきた。私たちがこの本で「神話」と呼んでいるのは、それらの物語すべてのことにほかならない。

同じ考える力を持ちながら、人間は現在までいろいろな時代に方々で、それぞれの集団が他と異なる文化を持つことで、大きく相違したところのある生き方をしてきた。そしてそうしながら、そのそれぞれの文化の中で、自分たちがしている生き方がなぜ正しくて必要であるのか、そのわけを、神話によって説明してきた。どの神話の中でも、そのことのわけは、世界が現在のようになるよりも前の太古に起こった、いろいろな不思議な事件と結びつけられて説明されている。

このようなわけで、人間がこれまでに生み出してきた神話の数は、無数と言ってよいほどおびただしい。そしてそれらの神話はどれも、私たちの想像力を強く刺激して止まぬ面白さを持っている。そのような尽きぬ面白さと意味のまさに満ちみちた神話の世界に、これから初めて旅をしてみようとされる読者のために、この本はとても便利で親切であるだけではなく、かなり細かい点にまでわたってくわしい情報を与えてくれる、好個のガイド・ブックとして役立つに違いない。

この「監修のことば」では、その神話の旅に出発されるに当たって、世界と日本の神話につき予め読者に知っておいて頂くことが、旅をより興味深く実り豊かにするのではないかと思われる、いくつかの要点だけを、なるべく簡明に述べておくことにしたい。

現在の人間の地球上での活動は、今から約三万五千年ほど前に、後期旧石器文化の時代の幕開けと共に始まった。それと共にヨーロッパでは方々で、女性の体を石やマンモスの牙などを彫刻して表わした、小型の像が作られるようになった。一般に「先史時代のヴィーナス像」と呼ばれているこれらの像はどれも、乳房や腹、尻、股間部など、子どもを妊娠し生んで育てる生殖の働きと関係する体の部分が、現実にはけっしてありえ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

ぬほど誇張されて、大きく脹れた形をしている。また大部分の像には、顔に目、鼻、口などは表現されてはいないが、その顔がうつむいて、乳房や腹や、股間部を、じっと見つめているような姿をしている。その上いくつかの代表的な像では、両方の乳房の上に手と腕が、乳を出そうとして押しているように見える形でおかれている。

つまりこれらの像は、妊娠し生んで育てるという母親の三重の働きを、ただの人間の女にはけっしてありえない、巨大な力をもって同時に果たしている女神を表わしたものであることが、明らかだと思えるのだ。乳房や腹などの異常な脹れ方からは、この女神が同時に妊娠しながら生み、また育てている子どもは、それぞれが一人ずつではなく、おびただしい数であるように考えられていたのではないかと想像できる。

この同じ女神の働きを、この時代の人たちはまた、地下の洞穴の中に降りて行って、その奥の広くなった場所の壁や天井に、絵を描くことによっても、表現していたのではないかと思われる。これらの絵の描かれた洞穴は、フランスの南部からスペインの北部にかけての地域で、数多く発見されている。多くの洞穴では絵は、長くて入り組んだ迷路のような地下の通路を、大変な苦労をして通り抜けて、やっと行き着けるような場所にある。そしてそれらの絵の多くは、当時の人々の狩りの獲物だった野生の馬や牛などが、今にも絵の中から飛び出して来そうに見えるほど、迫真的に数多く描かれている。

この時代の人々がなぜ、こんな場所にこれらの絵を描いたのかと言えば、それは彼らが地下の洞穴を、女神の体の内部と見なしていたからだと思われる。絵の描かれた奥の広くなった場所は女神の子宮で、そこに行くために通らねばならぬ暗黒の長い通路は、女神の産道だと考えられた。それだからその産道を通り、女神の子宮の内部に入りこんで、そこの壁や天井に沢山の野獣を迫真的に描くことで、当時の人たちは、自分たちの暮らしに必要なそれらの動物を、たえず無数に妊娠して生み出してくれている、女神の有難い働きを、懸命に表現しようとしたわけだ。

私たち現在の人間の祖先たちはこのように、地球上に出現するとすぐに、彼らにとっ

てもっとも大切な生活の資源だった、狩りの獲物となる大型の野獣をはじめとして、人間の暮らしに必要なありとあらゆるものを、体から無尽蔵に産出してくれる大地を母神として崇めた。そして自分たち自身も、自然万物と同様に、その大地母神の子であると認識することでホモ・サピエンス・サピエンス、つまり優れて考える力を持ったヒト科の生物の亜種として生きることを始めたのだと思われる。それだからその人類の最古の神話はとうぜん、この大地母神を主人公にして、その偉大な働きの不思議と神秘を物語ったものであったにちがいない。

人間のあいだで語られた最初の神話の主人公だった、この大地の女神が持っていた、ありとあらゆるものを体から生み出す母の性質を、受けついでいると思える女神たちは、世界中の神話の中に出てくる。日本の神話のイザナミは、そのもっとも代表的な例の一つだ。

この女神は、日本の国土の十四の島を生んだあとで、いろいろなもののもととなる、大勢の神々も生んだ。それによって、海や、川や、山や、草木または風などが、この世界に発生した。最後にイザナミは、火の神を生んだために、体を焼かれ大火傷を負って死んでしまった。だが死ぬまぎわにも、苦しんで口から嘔吐したり、大小便を垂れ流すと、女神が体から排出したそれらの汚物までが、神々になった。そしてそのおかげで、金属や、粘土や、清水や、穀物など、人間の暮らしに大切なさまざまなものが、この世に存在することになったのだと物語られている。

大地母神が最古の神話の中で持っていたと思える性質を、びっくりするほどよく受けついでいる女神は、わが国の伝説にも出てくる。長野県の上村（かみむら）というところの伝説には、こんな不思議な話がある。

昔ある神さまが山の中で、難産で苦しんでいる山うばに会って、親切に介抱しその山うばがなんと、次々に七八〇〇〇人もの子を生むのを助けてやった。そうするとそれまで獣が一頭もいなかった谷が、たちまち沢山の鹿で溢れて、この神さまはそこから、ほ

しいだけ獲物を狩り取って帰ることができたという。

山うばと言えば普通には、人を取って食う恐ろしい化け物と考えられている。だがこの伝説に出てくる山うばは、苦しみにたえながら無数の子を生むと、山の中が獣で満ち溢れた。そしてそのお産を助けた神さまは、山うばからほしいだけ獲物を授かったといわれているのだから、けっしてそのようなこわい化け物ではない。お産のひどい苦しみに堪えながら、沢山の獣を生み出しては、狩人に獲物を与えてくれる、尊い女神であることがはっきりしている。

新石器時代になり、作物の栽培が始まると、人々は大地母神を何よりもまず、自分たちの生活に不可欠になったその作物をはじめとする植物を、体から豊かに産出してくれる、植物の母神と見なして崇めるようになった。植物は季節の変化につれて毎年、いったん枯れては、また新しく芽を出す。そして生長して大地の上に、美しく繁茂することをくり返す。それでそのことから、美男子の神が、植物の枯れる季節が来るたびに、惨たらしいやり方で殺されては、地下の世界に幽閉されて、母の女神を身も世もあらぬほど泣き悲しませる。だが芽生えの季節になると、また生き返って母神の愛児となり、成長すると母の愛人にもなることを、毎年くり返すという神話が生まれた。

エジプトの神話のオシリスや、ギリシア神話のアドニスなどの話は、この神話の代表的な例だが、『新約聖書』に物語られているイエス・キリストの話にもじつは、死んでまた生き返るこの植物の化身の神の神話から、強い影響を受けた痕跡が、はっきりと見られるのだ。「ヨハネによる福音書」には、イエスがあるとき弟子たちに、こう語ったと記されている。

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが死ねば、多くの実を結ぶ」。

つまり『聖書』にはイエスは、十字架にかけられて、本当に惨たらしいやり方で殺され、母のマリアや、マグダラのマリアらの女たちをひどく泣き悲しませた。だがそれか

ら三日後に墓の中から生き返って、彼の死をだれよりも激しく慟哭していたマグダラのマリアの前にまず現われ、この死と復活によって救い主のキリストになったのだと物語られている。その自分の運命をイエスはこの言葉で、作物の麦とそっくりなのだと言って、弟子たちに予め説明しておいたことになっているわけだ。

金属器の使用が始まり、王が神のように崇められながら国を統治する、「神王」の制度ができると、その文化の中では人々はとうぜん、天上の神々の世界にも一柱のもっとも偉大な神がいて、他の神々の王になっていると考えるようになった。そしてその場合にほとんどの神話では、その天上の神々の王である最高神は、自分より前に世界を支配していた神あるいは怪物と、太古に激しい戦いをした。そしてその強敵を撃滅し、天上の王の地位を暴力で奪い取って、現在の世界の支配者になったのだと物語られている。

ギリシア神話では最高神のゼウスは、父神のクロノスと熾烈きわまりない戦いをなんと十年も続けた。そしてその最後に、クロノスを雷で打って負かし、動けなくなったところを縛り上げて、地底の暗黒の場所に閉じ込め、それまで神々の王だった父の地位を簒奪して、世界を支配することになったのだと物語られている。バビロニアの神話の最高神のマルドゥクは、海水の女神で神々みんなの祖母だったティアマトと、一騎打ちの激しい戦いをした。そして恐ろしい竜の姿をしたティアマトを、網をかけて捕らえ、怒って口を大きく開いたところに、風をその口から送りこんで腹を脹らませ、そのあとから矢を体内に射こんで、内臓を切り裂き、心臓を射抜いて惨殺した。それから彼は、そのティアマトの死骸を、まっ二つに引き裂いた。そして半分を、上方に張りめぐらして天にし、残りの半分から大地を造って、その天地を神々の王として支配することになったのだと物語られている。

これとそっくりの神話は、『旧約聖書』の中にも出てくる。その神話ではイスラエル人の神ヤハウェも、世界を造ってその支配者になる前に、レヴィアタンという海に住んでいた竜の姿の怪物と戦って、殺戮したことになっている。その戦いのことは、「詩篇」の

ある箇所では、こう、歌われている。

「あなた（＝ヤハウェ）は、み力をもって海をわかち、水の上の竜の頭をくだかれた。あなたはレヴィアタンの頭をくだき、これを野の獣に与えて、えじきとされた」。

日本の神話にはこの点で明らかに、世界の他の神話と著しく違う特色がある。なぜならまず、太陽の女神アマテラスが、天上の世界の高天原で八百万の天神（あまつかみ）たちの女王になっているが、これは他の神話の神々の王が、決まって男神であるのと、あきらかに違う。その上そのアマテラスは、生まれるとすぐに、父神のイザナキから、高天原を支配せよと命令された。それですぐにその言い付けに従って、何の戦いもせずに、天神たちの女王の地位についたことになっている。こんな平和的なやり方で、位についたとされている神々の王は、世界中の神話を探しても、アマテラスのほかには見つけることがむずかしい。

アマテラスはまた、徹底して優しくて慈悲が深いとされていることでも、世界の他の神話の神々たちと、本当に際立って違っている。神々の主はほとんどの神話で、敵を殺すことに何のためらいも持たない。自分にそむく者に対して、それがたとえ仲間の神であっても、容赦なくあっと驚くほど惨たらしい罰を与え、見せしめにすると物語られている。ギリシア神話ではゼウスは、神の一人のプロメテウスを、鎖で柱に身動きができぬように固く縛りつけた。そしてそこに毎日、一羽の大鷲を送って、その神の腹を食い破って肝臓を貪り食うことを続けさせたと言われている。またゲルマン神話では、神々の王オージンは、ロキという悪神を罰するために、この神の息子の一人を狼に替えた。そしてその狼にロキのもう一人の息子を八つ裂きにさせ、その腸で父の神を縛った。それからその腸を鉄の鎖に変えて、ロキが世界の終わりの時まで、この鎖によって緊縛されたままでいるようにしたと言われている。

これらとまさに対照的なアマテラスの徹底した優しさと慈悲の深さは、とりわけ、乱暴な弟神のスサノオが天上でしたひどい乱暴に対して、この女神がどう対処したかを物

語った話から、はっきりと知られる。それによるとスサノオは、アマテラスが天上で作らせていた田のあぜを破壊し、また溝を埋めた。それからその田で取れるお米を、アマテラスがめし上がる祭りをするために、建てられていた神聖な祭場の御殿を、大便ですっかり汚してしまった。ところがそんなひどいことをされてもアマテラスは、スサノオをとがめもしないで、こう言って無理にかばってやったと言われている。

「大便のように見えるのは、酒に酔って吐いてしまったものでしょう。また田のあぜを壊したり溝を埋めたのは、地面がもったいないと思ったからでしょう」。

だが、スサノオは、それでもまだ乱暴を止めず、神の衣を織る作業が行なわれていた建物の屋根に穴を開けて、そこから皮を剥いだ馬を投げこんだ。それでそこで働いていた女神が、びっくりしたあまりに、手にもっていた機織りの道具の杼(ひ)を、自分の体の局所に突き刺して死んでしまった。そうするとアマテラスはついに怒って、天の岩屋の中に閉じこもった。それで太陽の女神が隠れてしまったために、世界中がまっ暗闇になって、八百万の天神たちもとても困ったと物語られている。

この話からアマテラスが、本当にびっくりするほど優しい性質の持ち主で、とんでもないと思えるほどひどいことをされても、なんとかして許してやろうとする。だがその情け深さのために、殺害が犯されることだけは、けってし我慢できないのだということが分かる。

他の神話の神々の王の男神たちとまるで違って、このように女神である上に徹底して情け深いアマテラスが、天神たちの女王になっているとされていることで、日本の神話には、世界の他の神話にほとんど類の見られない、本当にユニークな特色があることが明らかだと思われる。

一九九七年七月

吉田敦彦

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

知の探究シリーズ

世界の神話がわかる

目次

[口絵] 自然と神話 …… 巻頭

監修のことば 吉田敦彦 …… 1

[プロローグ] 現代人にとっての神話

人類四百万年前の選択 …… 20
神話への想像力 …… 23
神話の声 …… 26

[第一章] 神話とはなにか 高橋巨一

[1] 人類の誕生と神話の発生

人類の誕生とともにある神話の起源 …… 30
神話は哲学・科学・文学・宗教の母胎 …… 32
神話の特性 …… 34
神話発生の背景 …… 39
神話と儀礼 …… 41
神話が語られるとき …… 43
神話学の歴史 …… 44

[2] 神話の種類とその意味

神話の分類 …… 50
起源神話 …… 52
洪水神話 …… 57
英雄神話 …… 60
自然神話 …… 62
動物神話 …… 64
創世神話 …… 66
政治神話 …… 68

[3] 民族・文明の興亡と神話の変遷

対決する神話と融合する神話 …… 70
盗まれた神話 …… 74
抹殺された神話 …… 76

[第一章] ヨーロッパの神話・伝説

和田義浩

[1] ギリシア神話

[I] ギリシア人が残した基本資料

いち早い文字化の歴史が
原初形態での神話の保存を可能にした……80

[II] 世界の創世からゼウスの支配権の確立までの歴史

重要な神々を生むガイア、
オリュンポス神族の最初の神を生むレア……82
ティタン族との戦いに勝利するゼウスと
オリュンポス神族……84

[III] 人間をめぐるさまざまな伝承

ゼウスが生んだ「鉄の種族」は、
不幸なわれわれ「人間の種族」……86
史上初の女性パンドラが開けた
甕の中に残されたのは、「実のない希望」?……87

[IV] ギリシアの「英雄伝説」

I ヘラクレスの生涯……89
II カドモス王の娘たちをめぐる悲劇……91
III オイディプス王の悲劇……93
IV アルゴナウティカ
——「アルゴー号」と「金毛羊皮」の物語……96
V トロイア戦争——英雄アキレウスの物語……101

[2] ケルト神話

[I] ケルト人および基本資料について

アイルランドの伝説のなかに息づく
異教時代のケルト神話……108

[II] 「陸のケルト」——ガロ=ローマ時代のガリアの神々

ガリア人の祖先は「父なる神」?……110

[III] アイルランドの「島のケルト」の神々

I 「五つの種族」の興亡……114
II ダーナ神族の神々……115

[3] ゲルマン神話

[I] ゲルマン人および基本資料について

世界の創世から終焉と再生まで――壮大なドラマを展開する「エッダ」……120

英雄叙事詩「ニーベルンゲンの歌」の素材は「ヴォルスンガ・サガ」にある……121

[II] 創世神話

I 原初の状態と巨人ユミルの誕生……122

II ユミルのその後と神々による天地創造……122

III 人間の創造……123

IV「アースガルズ」の建設……123

V 太陽と月の運行、そして虹の成り立ち……124

VI 最後の創造――「小人」たちの創造……124

[III] 世界樹「ユグドラシル」

創世神話の平面性に対し、上下の重層世界を構成……125

樹を支える三本の根とその根の先に展開する物語世界……126

[IV] アース神族とヴァン神族

I 二つの神族と、その争い……127

II 主要な神々と、その神話……127

[V] 巨人たちの襲来と「神々の黄昏」

アース神族と巨人たちとの最後の死闘……140

世界と神々の終焉ののちの新しい世界像……141

[4] スラヴ神話

[I] スラヴ人および基本資料について

歴史のなかで分化したスラヴ人……146

I ロシアの初期「記述文学」……147

II スラヴ民族の「口伝文学」……148

III 外部の人間による記録……148

[II] スラヴ民族の神々

I「総世神話」に関する伝承……149

II 東スラヴ地域の神々……150

III 西スラヴの神々……152

[第三章] アジアの神話・伝説

山本和信

[1]インド神話
インド神話の背景……154
「ヴェーダ」の神々……157
「ヴェーダ」の天地創造神話……158
ヒンドゥー教の神々……160
[2]ペルシア神話
ペルシア神話の背景……164
ゾロアスター教とその神々……165
天地創造と終末……167
英雄伝説……168
[3]中国神話
「神話なき国」の神話……174
天地創造の神話……176
人間創造の神話……178
太陽と月の神話……179
洪水神話……181
[4]朝鮮・韓国神話
天地創造……182
檀君神話……184
扶餘と高句麗・百済の建国神話……186
新羅の建国神話……189
駕落国(伽耶)の建国神話……190
耽羅の建国神話……191
[5]日本神話
日本の神話の特徴……194
イザナキ・イザナミによる国造り……196
黄泉国……197
荒ぶる神スサノオ……198
アマテラスの石屋戸隠れと五穀の起源……199
スサノオの大蛇退治とオオクニヌシの地上平定……200
天孫降臨……202
沖縄の国造り神話……204
アイヌの国造り神話……206

[第四章]アメリカ大陸の神話・伝説　高橋雅子
[1]アメリカ・インディアンの神話とその背景
ベーリング海峡を渡ったモンゴロイド……208
「文字と紙」をもたないインカ帝国……209
突如、神殿都市を放棄したマヤ……210
かつてアメリカ大陸に馬はいなかった……210

[2]インカとアンデスの神話・伝説
スペイン人によって採集された始祖伝説……212
インカ王朝の起源神話……213
インカのピラコチャ神話……215
インカ族の太陽崇拝の起源……217
ワロチリ地方の動物起源神話……218
アンデス高地の双子の英雄神話……220
[3]アステカとマヤの神話・伝説
アステカ、マヤ神話を貫く二元論……222
アステカの創世神話……223
トルテカの政治神話……226
マヤの創世神話……227
双子の英雄神話……228
[4]北米インディアンの神話・伝説
無秩序なエネルギーを発するトリックスターの存在……236
北西海岸インディアンの天体神話……237
ポーニー族の動物神話……239
エスキモーに伝わる動物の起源……240
ヒューロン族の創世神話……242
ズニ族の創世神話……243

[第五章]「記・紀」神話の謎と世界神話の類似性
鮎木周兒夫

[1]「記・紀」の背後に潜む「殺戮の歴史」
戦後の「記・紀」研究に大きな影響を与えた津田左右吉……246
「記・紀」神話の背後で動く政治的意図の主体は藤原家か……248
殺さなければ殺される、皇位継承をめぐる陰謀……252
大混迷への序曲だった鎌足と天智、盟友二人の死……254
[2]「記・紀」編纂を陰で操った藤原不比等の謎
七世紀最大の内乱「壬申の乱」を、抹殺されずに生き延びた不比等……256
不比等登場までのワンポイント・リリーフだった中臣大嶋……258
不比等が「殺戮の歴史」から学んだ「わが身」防御の公式……261

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com